

令和 8 年度 霞ヶ浦学講座
「江戸時代の水郷めぐり旅～江戸時代の旅日記をたどる～」実施報告

実施日時：令和 8 年 7 月 12 日（日）13:30—15:00

場所：霞ヶ浦環境科学センター多目的ホール

講師：長谷川良子 氏（茨城県立歴史館 首席研究員） 参加者数：27 名

テーマ：「江戸時代の水郷めぐり旅～江戸時代の旅日記をたどる～」

講演概要

江戸時代の旅は大衆化し、寺社参拝、名所旧跡巡り、湯治などが行われました。霞ヶ浦周辺でも航路、河岸が整備され、鹿島神宮、息栖神社、香取神社をめぐる三社巡りも盛んになりました。

旅日記には、旅のルート、名所の印象や舟運の実態が記録されており、当時の水郷の姿をうかがうことができました。

【講師資料より】

（１）水郷巡りのルート

江戸からは、行徳を経て木下または源田へ向かい、香取・潮来・息栖・鹿島へ至る水路が利用されました。北関東・東北からは霞ヶ浦・北浦東岸沿い、または飯沼街道を下して水郷へ向かうルートが取られました。

（２）旅日記に見る水郷の名所

旅日記には、鹿島神宮・息栖神社・大杉神社・浮島などが代表的な名所として記されています。

鹿島神宮

要石

その大きさについてふれられています。想像していたものより小さいという印象が記されています。

「かなめ石高さ七八寸、まわり三尺ばかり」

（阿部庄兵衛「伊勢参宮所々名所并道法道中記」（阿部彰晤編『伊勢参宮所々名所并道法道中記』）

「いがきのうちにいとちひさき石をおきたるにて、名たかきばかりにはあらず」

（小津久足「陸奥日記」（『東北文化資料叢書 11 小津久足 陸奥日記』）

物忌館（鹿島神宮の女性祭祀者。神主家の童女が亀卜で選定され、物忌館で精神潔斎の生活を送り、重要な祭儀の時に本殿に出向いた。物忌館は、神野村に存在。）

「この御神は女性神なり。御直筆御守品々出し申し候、安産守を受け申すべく候。」

（阿部庄兵衛「伊勢参宮所々名所并道法道中記」（阿部彰晤編『伊勢参宮所々名所并道法道中記』）

息栖神社

女瓶（めがめ）と男瓶（おがめ）についてよく記されていました。

（息栖神社の一の鳥居の両脇に二つの四角い井戸「忍潮井（おしおい）」があります。そ

それぞれの井戸の中に小さな鳥居が建てられ、水底に二つの瓶があります。)

「鳥井の元に漕寄れば、此の中頃に女瓶とて、四方形なる中にありといへども、たしかに見えず。夫より沖の天門の元に寄れば、男瓶とて凡そ二間程もありと見へたり。」

(大原幽学「諸君子句集」(『大原幽学全集』))

大杉明神(ルートの的には遠回り)

江戸時代にたびたび焼失していますが、幾度となく再建されており、建築物のすばらしさに感動している旨が記されています。

「～(略)～、少々道のくり合せ悪しく候ともこの所へ参詣つかまつるべく候」

(阿部庄兵衛「伊勢参宮所々名所并道法道中記」(阿部彰晤編『伊勢参宮所々名所并道法道中記』))

「御普請・彫物・組物結構不筆及候」

(菊枝楼繁路「伊勢参宮旅日記」(『石巻の歴史第9巻 資料編3 近世』))

浮島

当時の浮島は文字通り「島」だったこともあり、ランドマーク的にふれられています。

「～略～。忽ち、長鯨の烟波の間に浮かびて隆脊にして脩尾なるを見る。已にして近づけば乃ち - 嶼なり。」 (藤森弘庵「航湖紀勝」) 大森林造訳『航湖紀勝』ふるさと文庫別冊1)

「このうらのひろきこと、いはんもさらにて、浮島という島ありて、それには人家おほし。又そのしまに城跡ありといふ。風あしき時は、このしまのうしろのかたをかよふし。」

(小津久足「陸奥日記」(『東北文化資料叢書11 小津久足 陸奥日記』))

(3) 旅日記に見る舟運の諸相

旅日記には、船の借用や舟賃、天候による引き返しなど、舟運の具体的な様子が記されています。

木下出舟の場合、船頭の食事は客側が賄った旨が記されています。

「かくて船かりてそれにのりぬ・・・(略)・・・すべて木下よりのる船は、船人の食事などもこなたよりあかなふさだめなれば、・・・(略)・・・」

(小津久足「陸奥日記」(『東北文化資料叢書11 小津久足 陸奥日記』))

北浦北岸の銚田から南岸の鹿島(大船津)まで夜船で移動、途中(札・居合)で休憩したことが記されています。

「ほこたえ貳り、此所に舟に乗る、舟賃壹人百拾貳文、かしまさま迄夜舟六里、ふだと云所にて休、いやいにてやすむ、鹿嶋へ付」

(半田莊兵衛「鹿嶋道中記」(栃木県立文書館廣田綱枝家文書))

木下から夜船で出航したが、風の状況が悪く木下に戻ると天候によって引き返したことが記されています。

「木下嵐に着ぬれば、日はくれはてけり。より舟に乗て、宵の程に四里はかり漕出しに、風あしきとてかえりぬ。」

(有井諸九尼「秋風の記」(『湖白庵諸九尼全集』))

舟湯（舟に風呂桶の設備をした有料の入浴場）でくつろいでいることが記されています。

「此処（息栖）は舟湯なるよし、（略）川に葦簀建廻し、其中に舟をうかべたり、熱ければ
すぐに川水はいる、浴はてゝ舟端に出、川水にて手拭すすきゝながら汗干す、（略）」

（竹村立義「鹿嶋参詣記」（佐倉江戸かなを読む会編『鹿島参詣記』）



（文責 小川）